読書の勧め

企業にとって理念とは何か?

辻田征男　社会医療法人財団 石心会専務理事

およそ名の知られた企業にとって、企業理念を定めていないところはないと言って過言ではない。それは、1995年に初刊本が発刊されたこの本の影響によるものが大きいと言える。

なぜなら、『ビジョナリーカンパニー（visionary company)』は、全世界で数百万部を売り上げた大ベストセラーのビジネス書であり、企業理念の大切さを説いた本だからだ。

今日の医療機関における理念も、まことに多種多様、言葉を尽くして語られている。それは医療機関が人の命を扱う業種であり、そこで働く者が一丸となって患者の命に向き合うことを期待しているからに他ならない。

だが大半の企業における理念の扱いは、普段は省みられることなく死蔵されているように、医療機関においても少数の病院グループを除いて、それは病院機能評価の調査時に暗唱するお題目化していると言って間違いではない。

しかし、ここに、理念の徹底こそが偉大な企業を作り上げる必須の条件であることを発見した研究成果がある。その研究成果を出版したものこそ『ビジョナリーカンパニー』である。

その特徴は徹底的に企業の生態を観察した記録であるが、その点で著者のジェームスC.コリンズ（スタンフォード大学ビジネススクールの研究者）らは、P.Fドラッカーの後継者と言われている。この著作の特徴は、良い企業と劣った企業とを比較したものではなく、飛び抜けた優良企業（ビジョナリーカンパニー）と普通の優良企業を比較したもので、言い換えればgreat companyにあってgood　companyにないもの、それこそが基本理念の徹底であるとしているところにある。著者がいう基本理念とは、企業理念の中核をなす基本的価値観を指している。

それではこの本の言うビジョナリーカンパニーとは具体的にどんな企業を指すのか？ 著者は幾多の例を挙げているが、我々医療者になじみ深いものとしては、米国の製薬会社メルクアンドカンパニー（以下メルク社）の、基本理念の徹底的な追求が紹介されている。

『ビジョナリーカンパニー』
ジェームスC.コリンズ、
ジェリーI.ポラス共著
山岡洋一訳
発行 日経BP出版センター
定価 1942円＋税

メルク社は、2015年度ノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智博士との共同研究で1987年に開発したオンコセルカ症（河川盲目症）の特効薬イベルメクチンをアフリカ等の発展途上国の人々に無償でかつ自らの手で配付して２億人を盲目の病魔から救った。

メルク社の基本理念は「我々は人々の生命を維持し生活を改善する仕事をしている。全ての行動はこの目標を達成できたかどうかを基準に評価されねばならない」というものだ。

著者はこうした理念を徹底することと、利潤を産むことが相反事項でないばかりか、理念の徹底こそが巨大な富をもたらす例として第二次世界大戦後採算を度外視して、日本にストレプトマイシンを持ち込み結核を撲滅させたことと、後にメルク社が日本における米系最大手の製薬会社になったこととは決して偶然ではないとしている。確かにこのようなメルク社の献身が、日本市場を支配しようとする打算抜きで行われたわけではないことは当事者も認めているところである。著者はこうした企業を「現実的な理想主義」と評している。

今日メルク社は８万人の従業員を抱える企業として全米２位の製薬会社に成長している。だが、メルク社にもたらされたものは莫大な富だけであろうか？ 否、世界中の人々からの尊敬のまなざしもまた何物にも代えがたい彼らの財産になったのである。

本書は全５巻で構成されておりそのボリュームからいささか取っ付きにくいかもしれない。だが、翻訳者の山岡洋一氏の名訳で案外スラスラと読めてしまう。まずは第1巻にトライしてみてほしい。